

「自己指導能力」を高め、自ら生活するコミュニティをよりよくしようとする生徒の育成
～生活心得（校則）の見直しに関わる活動を通して～

小牧市立味岡中学校 小川 秀和

1 主題設定の理由

令和4年12月告示の『生徒指導提要』によると、「生徒指導」とは、学校の教育目標を達成するために、学習指導とともにとても重要な意義をもつものであるとされている。また、生徒指導の目的として、「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること」と示されている。そして、この生徒指導の目的を実現するために、生徒一人一人が「何をしたいのか」、「何をすべきか」、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、目標達成のために自発的・自律的かつ他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力、すなわち「自己指導能力」を、教師・仲間との関わりや、授業における学び合い活動などを通して獲得することが大切であるとされている。

私が勤務している中学校では、生徒が参加する生活心得（校則）の見直しに関わる活動を、『生徒指導提要』が改訂されたことをきっかけに2年前から始めた。「生活心得検討委員会」では、教師の代表と生徒の代表が意見交換することで、生徒達が抱えている日常の困り感を教師側が把握し、現状の生活心得についてどのように改定されると学校生活を送りやすくなるかを直接主張できる場として活用している。また教師側も、生徒に対して積極的に生徒指導の方針や意味などについて発信することで、教師側の心得についての考えや意図についての理解を図ったりできる場として重要視している。この検討委員会において生徒側・教師側という2つの視点から改善策を検討することで、生徒の中でも生活心得の合理性についても生徒の理解を深めることができる機会となることから、生徒・教師共に納得感のある生活心得となり、より安全・安心な学校の風土が醸成され、生徒の本分である学習により集中しやすい環境になるのではないかと考えた。さらに、運用の実際を定期的に振り返る機会を設けることで、生徒自身が現状を把握し、新たに生まれている課題に気付けるのではないかと考えた。そして、心得改定の意図を、より学校・学年・学級などに広める方法を考えたり、代表以外の生徒も見直しの意義や意図をより深く理解し、自分自身の行動や考え方を振り返ったりすることで、元々生徒自身がもっている「自己指導能力」のさらなる向上につながるのではないかと考えた。これら3つの考えをもとに、生活心得の見直しに関する活動の一つのきっかけとして、生徒が自発的・主体的に活動し、社会生活で必要となる資質・能力を身に付ける過程を支えたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説及び検証方法

(1) 仮説

生活心得の見直しに関する活動を通して、生活における困り感を自ら認識し、改善するための手立てや意図を考えたり、定期的に振り返りを行ったりすることで、生徒自身が自ら所属するコミュニティをよりよくしようと意欲的に行動できるようになるだろう。

(2) 検証方法

視点Ⅰ 生活心得について、生徒一人一人が自分事として向き合う場面をつくることで、現状の生活での困り感がより具体的に現れるのではないかと。

方法①…「生活心得に関するアンケート」を実施し、困り感の実態を把握する。

方法②…生活心得検討委員会を開催し、アンケート結果をもとに改定案を検討する。

視点Ⅱ 改定案の意図を生徒自身が理解し、判断して行動できる力（自己指導能力）を

高めることで、生徒の規範意識がさらに高まるのではないかな。

方法①…生活心得検討委員会の中で、前年度の改定についての振り返りを行う。

方法②…第2回「生活心得に関するアンケート」において「学校に適した状態」の判断ができているか、自己評価をする。

(3) 検証計画

年 度	月	内 容
令和4年度	10月	第1回生活心得に関するアンケート実施（全校生徒）
	11～12月	生活心得検討委員会の開催（靴・靴下の改定）
令和5年度	1月	生活心得検討委員会の開催 （防寒着の改定、前年度改定の振り返り）
令和6年度	7月	第2回生活心得に関するアンケート実施（全校生徒）

3 研究の実際

(1) 視点Ⅰの検証

① 第1回「生活心得に関するアンケート」の実施（令和4年10月）

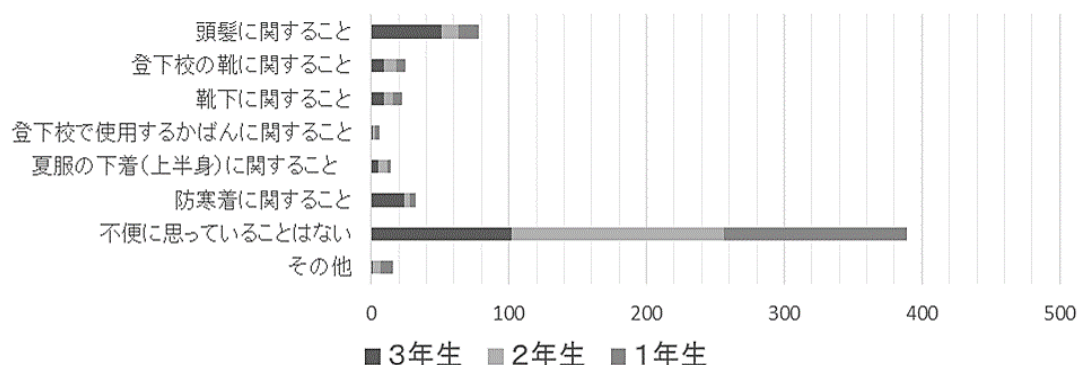
まず初めに、全校生徒を対象とした「生活心得に関するアンケート」を実施した（当日出席者582名に実施）〔資料1〕。生徒に提示したアンケート実施の目的は、以下の3点である。

- ・ 本校の生活心得が、学校の教育目標を達成するために、必要かつ合理的な範囲内で定められているものかを確認する機会にする。
- ・ きまりを守る意義や規範意識の向上を図るとともに、皆が安全・安心に学習に集中できる環境を整える。
- ・ 生活心得を社会情勢や地域の実態に即したものににする。

教師側にとっても、生徒側にとっても、初めて双方向により行う検討である。意見の焦点化を目的として、アンケート内容を「身だしなみ」に関することに限定した。また、当日全校生徒に対して、上記の実施目的を説明した動画を全学級で視聴させた。動画視聴後、各担任で意図を補足し、アンケートを実施した。

〔資料1〕実施したアンケート （1年生用）

以下は、設問1「味岡中学校の生活心得の中で、不便に思っている点や、改善されるとより学校生活が送りやすい、または学習に集中しやすい点を選んでください」の集計結果である〔資料2〕。



〔資料2〕第1回「生活心得」に関するアンケート 設問1 集計結果

全校生徒の67%（389人）が「不便に思っていることはない」と回答し、本校の身だしなみについての規定は、多くの生徒の中で必要かつ合理的な範囲内で定められていると認識されていることが分かった。しかし、全校生徒の13%が「頭髪に関すること」（78人）、8%が「靴・靴下に関すること」（47人）、5%が「防寒着に関すること」（32人）を選択肢、学校生活の中で不便に思っている生徒もいるという実態が明らかになった。上記の3項目については、3学年の中で3年生の割合が高い傾向であった。（頭髪：51人、靴・靴下：18人、防寒着：24人）

設問1を踏まえて記入させた、設問2「どのような点が不便と感じているか」で挙げられた意見は、以下の通りである〔資料3〕。

＜頭髪について＞

- ・ 髪型を選ぶときに選択肢が減り、自分のしたい髪型に出来ないこと。
- ・ 整髪料の使用禁止や、髪の毛をヘアアイロンで整える【巻くの禁止】など、ヘアセットに制限があること。
- ・ ツーブロックを認めてほしい。

＜靴下について＞

- ・ 緑色のスリッパをはいていると白い靴下に緑色が色移りしてしまうのが不便だと思う。
- ・ 高校では黒色の靴下になり、社会人になっても黒色の靴下なのに、なぜ中学校は白靴下でないといけないのかなと思いました。
- ・ 夏は暑かったりするからくるぶしソックスは認めていいと思う。

＜靴について＞

- ・ 自分の外出用に使っている靴を土日に使っていて、その次の月曜日とかに間違えてその靴を履いてきて途中で帰らないといけなくなったりすることがあるから。
- ・ 駅伝部などの活動の際に必要とされるランニングシューズは色のついた物が多い。そのため、その一時的な活動が終われば、その靴を使えなくなってしまう。
- ・ 白一色だと体育でも使うし、登校の時とかに汚れたら結構目立つし落ちにくいから。

＜防寒着について＞

- ・ 校内でセーラー服の上に着用していいものがジャージだけだと薄くて寒く、中にセーターなど重ね着すると脱ぎ着しにくく動きにくい。
- ・ ダウンジャケットのほうが温かいので、認めてほしい。
- ・ 人によって暑い寒いがあり、自分に合ったものが使えないから。
- ・ コートは重く、かさばるため、ロッカーでの保管が難しい。ダウンジャケットや中綿のジャケットならば小さくなるため保管しやすい。

〔資料3〕 「生活心得」に関するアンケート 設問2で挙げた意見の一部

様々な意見が挙げられたが、生徒達に共通している一番大きい考えは、「選択の幅」を広げてほしいというものであった。例えば、「頭髪に関すること」に関しては、整髪料の是非や、ツーブロックなど自分がしたい髪型ができないという意見、靴・靴下については、靴・靴下ともに白基調や白一色だと汚れが目立ってしまうので、色の選択ができると良いという意見である。実際靴下については、本校では学年カラーのスリッパ型中履きを使用しているが、アンケートを実施する前から普段使いしているだけでも中履きの色が靴下に移ってしまうという悩みが生徒から出ており、〔資料3〕に記載した意見以外にも、色移りで困っているため、靴下の色の選択肢を増やしてほしいという意見が多く挙げられていた。また、近年の酷暑対策という視点も含めたくるぶしソックス着用の解禁、防寒着については、現状認めているコートに加え、安価で購入しやすいダウンジャケットや中綿のジャンパーの解禁等、選択肢の拡大を求める意見が挙げられた。

② 生活心得検討委員会の開催（令和4年11月・12月、令和6年1月）

以下は、生活心得検討委員会が行われる前までの本校の生活心得である〔資料4〕。

2. 頭 髪

- 中学生らしい清潔な髪型とする。

3. 服 装

(3) 靴・靴下

- 靴は、白を基調とした体育時に用いる運動靴とする。
- 靴下は白を基調とし、くるぶしが完全にかくれるものとする。
(ライン、ワンポイント程度)

(4) 防寒着

- セーター・トレーナー：白、黒、紺、灰色のものとする。
 - コート：飾りのないコートとする。ただし、色については派手でないもの（黒・紺・灰色）とする。
 - 手袋・マフラー：特に色の指定はしないが、華美でないものとする。
- ※ 体温調節のために、味中指定の体育ジャージを制服の上から着用してもよい。

〔資料4〕令和4年度生活心得（該当箇所のみ）

前述のアンケート結果を踏まえ、生徒の健康面や安全・安心な学校生活を送ることを重視し、生活心得検討委員会の1年目は靴・靴下、2年目は防寒着の検討を行うこととした。なお、比較的多くの声が挙がった頭髪の検討については、検討委員会を実施する前に性的マイノリティの生徒に柔軟に対応できるようにするために、男子の行き過ぎた長髪は指導対象とするなどという頭髪についての男女別の運用面の合理的な見直しを行うことを決まっていた。また、生徒からも声が挙がっていたツブブロックについても、近年清潔感がある髪型として一定の評価がされているが、〔資料4〕にもある通り、頭髪についての生活心得はとてもシンプルなものである。その結果、生活心得の文言を改定する必要が無く、運用面の合理的な見直しで対応できるため、生活心得検討委員会での議論対象とせず、新年度より運用面の変更を行うこととした。生活心得検討委員会には、学校側からは校長、教頭、教務主任、校務主任、生徒指導主事、学年主任、特活主任が参加した。生徒側からは、生徒会本部役員（生徒会長、副会長、2年書記2名、1年書記2名）が参加した。

まず初めに、靴・靴下、防寒着について生徒代表に改めて「どのような点で困り感をもっているか、またどう変わるとよりよい生活になるか」という考えを聞いた。その時に生徒代表より挙げた意見が〔資料5〕である。

<靴について>

- ・ 白基調限定だと汚れが目立つので、頻繁に洗わなければならない、また汚れが落ちづらいため、洗う時にとても大変である。
- ・ 並んだ時に見分けがつかない。靴に名前は書いてあるが、一目見ると同じような靴が並ぶため、下駄箱以外に靴を置く場面だと、どうしても自分の靴を探すときに時間がかかる。結果、行動が遅れてしまうことがあった。
- ・ 登下校で使用する靴よりも、最近市販されているランニングシューズのほうが軽量でクッション性もあり、味岡中は遠くから歩いて登校する生徒もいるので足への負担が減ると思う。しかし、ランニングシューズで白基調のものが少ないため、色の指定があると選択肢が少なくて困った。

<靴下について>

- ・ 日常生活で履いているスリッパが色移りし、白い靴下が染まってしまうことがあった。洗っても落ちないため、あまりにも色移りした靴下は買い替える必要があった。
- ・ 市販されている靴下もくるぶし丈のソックスが増えている。また、普段使いの靴下もくるぶし丈が多いが、学校用と区別しなければならない、面倒だと思うことがあった。

<防寒着について>

- ・ コートだと高価で、かつ重いので日常使いづらい。また、もっと防寒性能が高いジャケットが販売されているので認めてほしい。
- ・ 部活動で使用しているジャージを登下校でも使用できると、より荷物も減って楽になると思う。
- ・ かさばらず、制服の中に着ることができる防寒具もあるので、着用できると授業中も温かく過ごせると思う。

〔資料5〕生活心得検討委員会において生徒代表より挙げた意見の一部

生徒代表の意見と先ほどのアンケート〔資料3〕を合わせて見ると、やはり色や種類といった「選択の幅」を広げてほしいという考えが多数であった。これらを踏まえ、靴は「学校に適した靴とは」、靴下は「くるぶし丈の靴下を認めるか」防寒着は「学校に適した防寒着とは」という議論テーマを設定した。

議論は、生徒代表がアンケート以降も積極的に級友を中心に声を拾っていたので、とても活発に意見が出された〔写真1〕。最初に議論した靴について、「学校に適した靴」とは「体育や部活動等の運動に適しており、登下校等の場面での安全性も確保された靴」と生徒とともに定義した。そして、具体的な靴の例を出しながら、登下校や運動に適した靴についての共通理解を図った〔資料6〕。その結果、「学校に適した靴」という意味を生徒全員が理解し、適切に判断できる生徒を目指すという生徒代表の思いを受け、現状の「白を基調とする」という規定を改定し、先ほどの定義をもとに自ら学校に適した靴を判断するということとした。同様に、靴下についても色移りせず、かつ制服と合う靴下の色として、白に加え黒、紺、灰色を選択肢として加えた。また、議論のテーマであった「くるぶしソックスを認めるか」については、昨今の酷暑対策を含めた体調管理の視点や、活動内容によってどのような靴下を選択するとよいか判断できるようにという目的で、くるぶし丈の靴下も選択してよいこととした。防寒着は、「学校に適した防寒着」を「ロッカーに収納できる、防寒対策（風が入らない）が取れるもの」と定義し、従来のコートに加え、安価で購入できるようになったダウンジャケットや中綿が入ったジャンパーも選択できるようにした。また部活動で購入し、着用しているウインドブレーカーも選択できるようにした。さらに、教室内での防寒対策として、薄手のダウンベストやカーディガンを新たに選択できるようにした。最後に、「学校に適した」という言葉の意味と「なぜこの生活心得になったのか」という部分について、教師側も生徒側もお互いにいろいろな場面の中で伝え、生活心得に関する判断意識を向上させようと共通理解した。議論の結果、本校の生活心得は以下のように改定され、新年度から採用することとした〔資料7〕。



〔写真1〕生活心得検討委員会の様子

- ・ トレーニングシューズ
…運動に適している
- ・ ハイカットの靴
…重く、動きづらい
- ・ 布製の靴…重く、足に負荷がかかる
- ・ 革製の靴…通気性・クッション性が低く、運動に向いていない
- ・ スリッポンタイプの靴
…脱げやすく、運動に適していない

〔資料6〕「学校に適しているか」
を検討した靴

（3）靴・靴下（令和5年度より改定）

- 靴は、学校に適した（運動や徒歩の登下校に適しており、安全性が確保できる）靴とする。
- 靴下は、白・黒・紺・灰色を基調とした靴下とする。（ライン、ワンポイント程度）

（4）防寒着（令和6年度より改定）

- 登下校時の防寒着
教室のロッカーで保管できるスクールコート、ダウンジャケット、ウインドブレーカーとする。学校生活に適した色や形のものとする。
 - 制服の中に着る防寒着
ベスト（薄手のダウンベスト含む）カーディガン、セーター、トレーナーとする。学校生活に適した色や形のものとする。（柄はワンポイント程度）
 - 手袋・マフラー
学校生活に適した色や形のものとする。
- ※ 体温調整のため、味岡中指定の体育ジャージを制服の上から着用してもよい。

〔資料7〕令和6年度生活心得（靴・靴下・防寒着のみ）

(2) 視点Ⅱの検証

① 生活心得検討委員会にて前年度改定の振り返りの実施（令和6年1月）

前年度改定（靴・靴下）の振り返りを行った。生徒代表には、「靴・靴下の改定をして味岡中・生徒にどのような変化があったか」というテーマを事前に伝えた。生徒代表は、生活心得改定時と同様、意欲的に各学級において靴・靴下の改定後の現状について意見を求め、検討委員会に臨んだ。

以下は、生徒代表から出された、上記のテーマについての振り返りである〔資料8〕。

< 2年生 >

○ 靴・靴下の改定のおかげで、色や形など活動に応じて選択の幅が広がったことがとてもよかった。

▲ 「自ら考え、選択する」ではなく、周りがこうしているから…という付度が働いている部分があると感じている。

▲ 改定時に込めた思いを伝えてはいるが、始まって半年以上経ったことで薄れていると感じる。このまま続けると、思いを忘れ、靴・靴下は「なんでもOK」という誤った認識が広まってしまう可能性があるのではないかと懸念する。

< 1年生 >

○ 先輩から改定時の話を直接聞いたことで、靴・靴下の規定を変更した理由と思いを詳しく理解できた。

▲ 入学時からすでにこのルールだったので、このルールが「当たり前」という感覚になりすぎている。靴・靴下を改定した理由や、そこに込めた思いを理解していない生徒が、特に1年生に多いのではないかと懸念する。

※ ○：良かった意見 ▲：改善すべき意見

〔資料8〕靴・靴下改定後の様子について振り返り

肯定的な意見として、活動に応じて選択の幅が広がったことが多く挙げられた。また1年生は、異学年交流等でつながっている2・3年生より生活心得が改定された理由を聞き、理解を深められたという意見が挙げられた。しかし、「学校に適した」という視点で考えたとき、自らの判断で決めているのではなく、周りの判断をもとに動いてしまう生徒や改定の意味をはき違い、すべて自由と誤解してしまっている生徒がいるのではないかと懸念する意見も挙げられた。

これらの意見をもとに、生活心得検討委員会として、改定までの話し合いの中で挙げられた思いである「自ら考えて行動できる味中生」を、在校生や今後入学してくる後輩達にきちんとつなげる取り組みを継続して行うことを確認した。その取り組みの一つとして、昇降口前に設置されている生徒会コーナーへ生活心得検討委員会の報告を掲示したり、生徒議会等で各学級のリーダーに意図を周知し、各学級で情宣したりするなど、検討時に込めた思いを定期的に伝える機会を設けたいという生徒代表からの提案がされた。生徒代表からの提案を踏まえ、生活心得検討委員会で話し合った内容が形骸化しないよう、先ほど挙げられた取り組みを実行に移してほしいと依頼した。また、職員にも職員会議等で議論の様子や生徒代表が取り組みについて周知し、担任を中心に各学級で再度生活心得が変更された意図や、そこに込めた思いのフォローをしてもらうよう、依頼した。

② 第2回「生活心得」に関するアンケートの実施（令和6年7月）

前回のアンケート実施から2年経ち、新たな生徒の困り感が生まれているのではと考え、現状の実態把握のために第2回「生活心得に関するアンケート」を計画し、全校生徒対象に実施した（当日出席者573人に実施）。今回のアンケートも前回との比較を行うために「身だしなみ」に関することに焦点化し、前回同様の設問を設定した。

今回、新たな取り組みとして、2・3年生のアンケートに「生活心得改定に込められた意味を理解し、自分で「学校に適したもの」の判断ができていますか」という設問を追加し、6段階で自らの取り組みについて自己評価させた。その設問の集計結果は以下の通りである〔資料9〕。

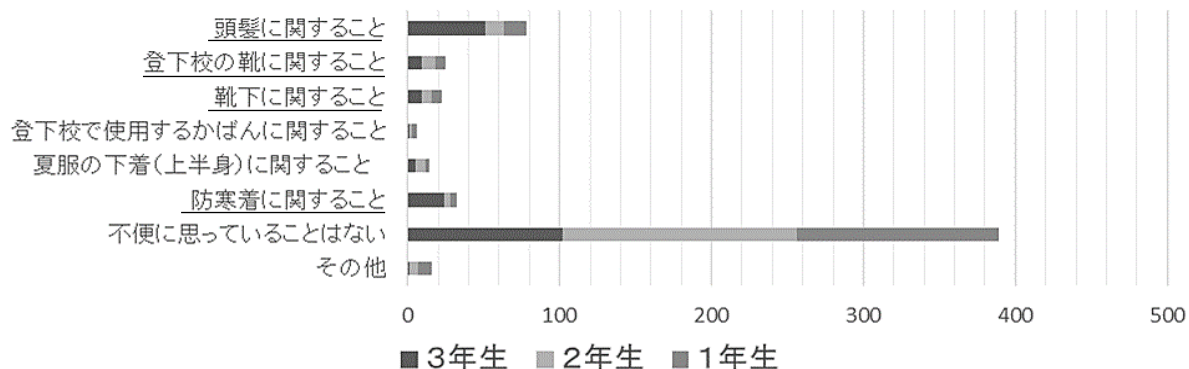
	2年(人)	%	3年(人)	%	2学年合計(人)	%
できている 6	109	51%	110	64%	219	57%
5	76	35%	44	26%	120	31%
4	24	11%	12	7%	36	9%
3	5	2%	4	2%	9	2%
2	1	0%	1	1%	2	1%
できていない 1	0	0%	0	0%	0	0%
実施人数	215	100%	171	100%	386	100%

〔資料 9〕「学校に適したものの」の判断 集約結果

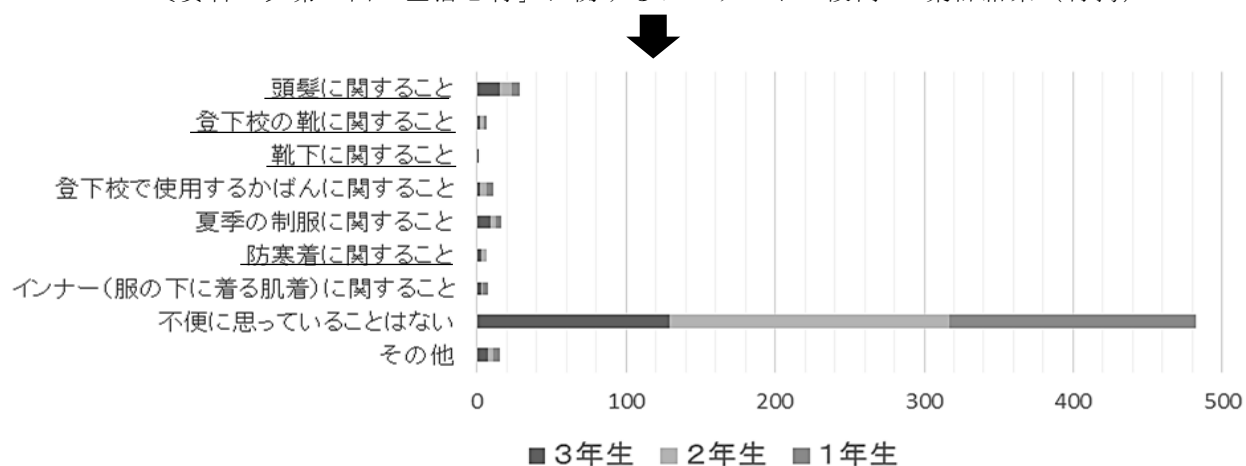
結果から、「できている」側の 6 と 5 を選択した生徒の割合が 2 年生は 8 6 %、3 年生は 9 0 %であった。2・3 年生の多数の生徒が「学校に適した状態」を意識し、自ら適切な判断を行いながら靴や靴下の選択を行っていることが自己評価していることが分かった。

4 成果と課題

視点Ⅰについて、生活心得検討委員会を定期的を開催することで、生徒も教師も困り感を把握することができた。数としてそれほど多くはなかったが、生徒の困り感を把握するために、声を上げる機会を定期的に設定することは、学校での生活のしづらさを感じていた生徒を救い、皆が安全・安心な学校生活を送るための風土を醸成するために有効な手立てであると感じた。実際に、第 2 回「生活心得」に関するアンケートの設問 1 の結果〔資料 1 0〕をみると、1 回目のアンケート〔資料 2〕よりも「不便に思っていることはない」を選択した生徒が増加（1 回目：6 7 %、2 回目：8 4 %）した。また、改定された靴・靴下に困っている生徒の割合は減少し（1 回目：8 %、2 回目：1 %）、生活心得が改定されたことによって、生徒にとって学校生活内の困り感が改善され、安全・安心に学校生活を送ることができるという、生活心得改定の目的に沿った結果となった。



〔資料 2〕第 1 回「生活心得」に関するアンケート 設問 1 集計結果（再掲）



〔資料 1 0〕第 2 回「生活心得」に関するアンケート 設問 1 集約結果（下線部：改定した項目）

また、アンケート実施にあたり、一人一台端末の有用性も大きいと感じた。全員が日常から使い慣れており、生徒もアンケート実施時に大きなストレスも無く入力することができた。また、なによりもタブレット端末を活用することで、結果を集約しやすい利点があるため、生活心得に関する生徒の困り感の早期把握にとっても役立つものであった。

課題としては、「安全・安心な学校生活」「学習に集中できる環境づくり」という、当初の改定目的を、日ごろからどのように生徒にもたせるかという点である。実際、〔資料3〕の回答の中に、「学校でも自分の好きな髪型がしたい」や「なぜ化粧はいけないのか」など、安全・安心な学校生活という目的とは異なる意見も少数ではあるが挙げられていた。「学校に適した」という視点を日ごろからもたせるために、教師の働きかけや指導、生徒間での意識向上等、生徒の生活心得に対する考え方を醸成させることが、規範意識の向上にもつながるだろうと考えた。また、教員間の「同僚性」の向上も、アンケート実施にあたり重要であると感じた。本校に限らず、どの学校にも経験が豊富な教師と経験が少ない教師など、様々な教師がいる。その中で、全体への指導とは別で各学級でどのような話を行い、生徒へアンケートの意味づけをするかが大切になってくる。今回の実践でも事前指導の内容や動画の原稿等は事前に職員に配布・周知し、その内容に沿った形で各学級での指導を行った。生徒指導と同様、日常からのOJTを積極的に行っておくことが、特別な指導や取り組みを行う時に、全学級同一步調で指導を行うことにつながり、より生徒にも実施意図が深まり、意味があるアンケート実施や結果につながるのではないかと感じた。

視点Ⅱについて、生徒から直接意見を聞き、また教師側の意見を伝えた上で決定し周知することは、生徒自身の規範意識の向上にとっても有効であると感じた。過去には「先生に言われたから」と守っていた生活心得が、最近では「学校に適したもの」という言葉の理解が生徒に浸透し、〔資料10〕の結果に表れているように、自ら判断して身だしなみを整えたり持ち物を選んだりする光景が増えたと感じている。特に、生活心得検討委員会を通じて改定された靴を見ても、〔写真2〕のように、「学校に適したもの」という共通認識のもと、その日の活動や天候によって靴を使い分ける生徒が増えた。このように、自分たちの意見が生活心得に反映されることは、生徒自身の心得に対する興味や関心、判断力の向上に有効であった。

課題としては、検討委員会の考えをどのように生徒に周知し、考えを定着させていくかである。〔資料10〕の結果でも表れているように、現時点では多くの生徒が「学校に適したもの」という判断ができていますが、年月が経つにつれ改定した意図や考えが薄れてしまう



〔写真2〕ある日の下駄箱

ことは往々にしてあると考える。実際、〔資料10〕の中で、4以下（できていない）を選択した生徒の割合が全体で12%（2年生：13%、3年生：10%）みられた。この数字がこれ以上増えないようにするための方法は、日ごろの教師の話や、先述の生徒会コーナーへの掲示など、日々考えて意識付けをしていく必要性を感じた。また生活心得検討委員会に生徒代表として参加している生徒会本部役員は、検討委員会以外にもさまざまな役割を抱えているため、この議論ばかりを取り上げる訳にはいかない。意図や考えをより定着させていくためにも、もっと参加者を幅広く人選し、過去の改定を振り返えったり、新たな改定を検討したりする場面を設定することが大切だと感じた。なお、令和6年度の生活心得検討委員会は、この反省を生かし、生徒会本部だけでなく各学年の代表・副代表や、生活委員会の委員長などにも生徒会本部より参加を依頼し、それぞれの視点から過去の改定を振り返えったり、検討を行ったりする予定である。

5 おわりに

生徒を交えた生活心得に関する検討を始めて今年度で3年目になる。実施前と実施後では明らかに生活心得に対する興味や関心、そして自らが所属するコミュニティをよりよくしようという意識は高まっていると感じる。やはり、「誰かが決めた」ものというよりも「自分たちで考えた、決めた」ものという認識、いわゆる主体性がある活動であったからこそ、生徒自身がしっかり守ろうという意識や、この考えを後輩に伝えたいという意識が高まったのだろう。しかし、主体的に決定された生活心得であっても、周りの影響や自らの認識の甘さがあると簡単に崩れてしまう。また、月日が経つことで改定に込めた思いが薄れてしまう。さらに、社会は、時代の変化や発展に伴って、ものごとの見方や考え方が大きく変化していくものである。今回改定された部分も、将来的には見方や考え方の変化に伴ってまた新たな改定がされていくであろう。その際に、「古い考えだから変える」という考え方だけでなく、「なぜこのルールが存在していたのか」を後輩に受け継いでいくことが、新たな発想や考え方が生まれるきっかけとなり、より生活心得と世の中の情勢についての合理性が議論され、その時代に即した生活心得に変わっていくきっかけになるのではないかと考える。今後も、改定についての振り返りや意識づけを、教師側そして生徒側両面から行うなど、生活心得改定に込めた思いを未来の生徒につないでいきたい。そして、これからも研究や研鑽を重ね、生徒の成長に情熱を注ぐとともに、生徒自身が安全・安心に、学習に集中できる学校環境づくりを心掛け、社会生活で必要となる資質・能力を身に付ける過程を支えたい。

参考文献

- ・『生徒指導提要』 文部科学省 令和4年12月改訂